佐多稲子「水」における敗北と春の陽
― 感情表現をふまえて ―

中山　悦子

一・はじめに

万物の根源は水である。生命の維持には不可欠であり、ほとんどの人にとっては、非常に身近なものであると言える。佐多稲子（一九〇四―一九九八）は、若い頃、「本が読みたい。渇しているものが水を飲みたいように」[一]という欲求があった。それで、上野の清凌亭での座敷女中を辞め、日本橋丸善書店洋品部へと勤めた。五十七歳の時、短編にタイトルもシンプルに「水」とつけ、世に送り出した（昭和三十七年五月一日、『群像』五号）。同作品は、富山県ゆかりの作品として、作者佐多稲子も来富者として県内で挙げられている。『群像』創刊七十周年記念号（平成二十八年）において、戦後を代表する名作短編の一つとして、三島由紀夫、太宰治、円地文子、室生犀星らと収められている。佐多稲子と同年生まれに、幸田文、堀辰雄、舟橋聖一、丹羽文雄、武田麟太郎がいる。

本作「水」では、主人公の少女・幾代および母親そして周辺の人物や風景の描かれ方が、抑制されている文章の中ででもリズム感をもって、まるですぐ目の前の情景のように描かれている。独特の言い回しで強調される表現は、稲子の言語的感性が光り、多くは語られていない作中でも読者の心へと強く響く。短編の巧者といえば、筆者は、芥川龍之介や円地文子を思い浮かべるのだが、特に、稲子の一歳年下の円地の短編、「ひもじい月日」（第六回女流文学者賞受賞）は、主人公が身体的弱者の女性であり、稲子の「水」を読む時、同作品を思い起こさせる。円地は稲子と同じく、長谷川時雨主宰『女人芸術』への執筆もあり、稲子と円地は対談などもあり、同時代の代表作家でもある。さらに、稲子は円地とは、「遠い親戚に当ることになったのである。[二]」と自身が述べている。

佐多稲子は十六歳、上野の料亭清凌亭で座敷女中をしていた時、偶然、芥川龍之介や菊池寛らに出逢い、さら

に、二十歳、カフェ紅緑で女給をしていた時、のちに二番目の夫となる窪川鶴次郎、中野重治、堀辰雄ら『驢馬』同人と出逢った。これらの偶然の出逢いは、稲子に作家という道へ進む大きなきっかけとなり、その後の人生は波瀾万丈ともなった。

さて、平成三十年は、稲子の没後二十年であり、本年は、生誕百十五年にあたる。昨年において、その記念展なるものは、長崎市や兵庫県相生市、墨田区、田端、大森など関連地で特に開催はなく雑誌の記念号としては、佐多稲子研究会編『くれない』第十二号、書肆草茫々・八田千恵子編『草茫々通信』第十二号の出版があった。

まもなく平成時代が終わり、新元号を迎えようとしている今、本稿ではまず富山県ゆかりの文人で明治期以降の特に女性作家、佐多稲子に注目してみたい。彼女の短編「水」は富山県文学関係略年表に昭和三十七年、松本清張「けものみち」などと一緒に掲げられている。県ではその前年に北陸線に特急「白鳥」が登場し、県下でカラーテレビ放送が開始された年である。「水」について、立野幸雄が『越中文学の情景』で、「この短編を読む度に文学の素晴らしさに目が洗われる。さり気ない描写で人の本質を見事に書き表している。[三]」と、論じている以外ほとんど見当たらないのではないか。

「水」において、幾代の哀れさ、けなげさに同情を寄せ涙し、作者が幾代へ春の陽を当ててあげたいという表現であるなど、従来のとらえ方は出つくしている感があるのではないだろうか。そこで、作者の言語表現について、特に、主人公幾代の感情表現をふまえながら、「敗北」ということばが、稲子の他作品でも目にする点でその意味するところを掘り下げてみたい。さらに、冒頭の「春の陽ざし」、および最後の「春の陽があたった」という表現は、作者が主人公幾代に対して、果たして前向きな温かい目を向けて、このように描いたのかを稲子の他の作品、および稲子自身のことばなどから考察してみたい。

二・稲子の小学生での退学

佐多稲子は筆名で、本名はイネ、長崎市八百屋町に、父・田島正文、佐賀県立佐賀中学校五年で十八歳、母・高柳ユキ、佐賀高等女学校の一年で十五歳だった二人の元に生まれた。このような複雑な出生からしてその後の

人生を考えた時、苦難の道を歩むことになると多くの人が想像するだろう。母親は稲子が小学校に上がった年に他界、二十二歳であった。死の直前、小学校へ上がり片仮名が読めるようになった稲子に「ヨクベンキョウシテヨイオクサンニナルヨウニ[四]」という手紙をくれた母だった。叔父の佐田姓を稲子が四十二歳の時に継いだ。

幼い頃から貧窮にあえぎ、十一歳、小学校五年で退学し、キャラメル工場で働き始めた。父は、幼い稲子に「女文士にしてやろう」と言ったことは稲子の心に残った。

父の弟である早稲田大学生だった叔父の佐田秀実を頼りに一家は長崎から上京、稲子の文才は長崎で叔父に連れて行ってもらった図書館でも培われた。その後、叔父は二十五歳で他界した。本作「水」はこの叔父が亡くなった際に、稲子が経験したことを題材にしている。

大正六年、父は相生の播磨造船所に単身就く。稲子は、女給やメリヤス工場で働いて生計を立てようとしたが、困窮し、芸者になろうとしたところ、相生にいる父親があわてて引き取った。大正九年、稲子は祖母ヨツと再び上京し、上野の清凌亭、丸善洋品部に勤めた。そして、最初の結婚相手、小堀槐三とは彼の暴力と疑心暗鬼でうまく行かず心中を図った。その後、稲子は相生に住む実父の元へと行った。そこでは、つかの間だが安らいだ生活ができ、十四歳の時、短文や短歌を投稿した。堀辰雄の紹介で、本名が片山廣子、歌人で翻訳家の松村みね子主宰の『火の鳥』に詩や小説を発表した。稲子は、いつも「テーマがない」と言いながら、自らの苦難の経験を、学歴がないことを幼い頃からの厖大な読書量と、運命とも言える作家たちとの出逢いを契機に自らのことばで表現し、生涯書き続けることによって作家として大成した。女中、女工をした経験は稲子を救ったのである。

先に挙げた、稲子が出逢った作家たち、さらには、田村俊子、宮本百合子、林芙美子ら多くの文人たちとの交流があり、稲子より先に逝った室生犀星、中野重治らを見送るため、多くの弔辞を読んだことにもなった。七十代に差しかかろうとする頃の稲子の写真が掲載されている文献を見ると、稲子自身が大好きだったいつもの和装姿で微笑んでいる。高く盛り上がった頬骨は目立ち、しっかりとした眉、大きめの鼻、そして少々厚めの唇、全体から醸し出す雰囲気は上品である。とても優しそうに見えるが芯が強く、凛とした印象のほうがある。若い時

から美しい人だった。稲子の波乱万丈の人生は、九十四歳で静かに閉じるのである。

三・水のメタファー

水とは何か。色は、青味がかって見えるが無色透明で、日本語で、水ということばは、「ＭＩ・ＺＵ（ミ・ズ）」という音の連続で、意味との間に必然的なつながりはなく恣意的であるが、美しい印象というものを備えている。日本語には、水、特に雨の表現は非常に多くの言い回しがある。金田一春彦は、「花は日本人の大好きな言葉で、（中略）水もまた好きな言葉で、「水を向ける」「水に流す」「水商売」「水物」「水くさい」など、たくさんの語句を作っている。[五]」と述べている

佐多稲子の「水」の最初の段落では、「泣いていた」という液体、「列車の鋼鉄の壁面」の固体、「空にはうらうらとした春の陽ざしが」と天、太陽、光が描かれ、タイトルは水である。水は液体、固体の氷、気体の水蒸気と形を変えられる。そして、日本の水は、清冽である。タイトルがシンプルな分、いろいろと想像ができるが決して、物理的な内容でも水を大切にしようという話ではなく、ジェンダーの問題、身体的、経済的弱者の問題、地方と都会の格差、母と娘の深い絆、雇う者と雇われる者の考え方の違いなどモチーフが多く含まれている。

本作は、左脚が少し短い幾代が、郷里富山県の入善の紡績工場では雇ってもらえず、上京して、同郷の主人の旅館で住み込みで働いていた。幾代は実母の危篤に際しても、信頼していた旅館の主人と妻から帰郷を待つよう言われ、「ハハシンダ、カヘルカ」の電報に旅館を飛び出した。幾代は上野駅のホームで一時間後に来る列車を待って、しゃがみこんで泣き続けている。そのような中でも、駅員が閉めるのを忘れた「水道の蛇口から当てなしに流れつづけている水」、それを「水道のそばを通り抜けぎわに」、無意識で栓を閉める。そしてまた、変わらずしゃがみ込んで泣き続ける幾代、「その場所に、さえぎるものがなくなって春の陽があたった。」という作品である。

作中には、「越中釜ヶ渕」「入善の紡績工場」、「富山市の病院」という富山県の地名が出てくる。地元では、「釜ヶ淵」で、その名前からも、「この土地に住んでいた医者が多くの娘を誘拐し、体を圧しつぶして体からにじみ出

た油を大きな釜にためて薬として売っていた。[六]」に始まる恐ろしい言い伝えが残っている。富山の方言「〜お金、おくってくれたでエ。」と語尾にアクセントをつけて、また、「なアん。」「(気にせん)こっちゃ」と、出てくる。金田一春彦が、「日本語は方言のちがいの激しい言語で、関東方言・関西方言・北奥方言・九州鹿児島方言など、それぞれヨーロッパへ持っていったら別々の国語だ。[七]」と述べている方言。稲子の方言に対するとらえ方の鋭さは、『女の宿』で見られる、いわゆる大阪弁の表現でも非常にうまく発揮されている。「水」は、単行本の頁数にして十頁に満たない作だが、奥野健男が、「一行一行に無限の人間のかなしみ、生活の重さがこめられて、(二十枚足らずの短編であるが)何百枚かの長編を読んだと同じ感銘を受ける。」、磯田光一は、「つねに日本という風土を生きる庶民の世界に、その根の一端を下ろしていた。そういう佐多氏の感性の一端を、読者は『水』のうちに見るであろう。[八]」、坂上弘は、次のように評している。

佐多さんの本領であり、一つの頂点でもあろう。しかも、ここには、幾代という少女の生き方を、佐多さんの生き方が、大きな翼のように被護し、その覆い方に、感傷のない、暖かいものが流れている。佐多さんの文学くらい、生活の仕方への感溺からも、時流の滓のような虚無からも遠いものはない。[九]

「水」は稲子が五十七歳の時の短編で、当時、小中学校の教材に使用された。読み終えた学生たちは、幾代の哀れさに同情し涙したという。昭和四十年代から五十年代に教材として使用され、浮橋康彦「佐多稲子『水』―研究授業を通しての教材研究―」(昭和四十二年)や、菅野圭昭「佐多稲子『水』の教材化をめぐって―教材研究と本文批評―」(昭和五十四年)などの研究論文もあった。平成二十八年度大学入試センター試験で、稲子の他の短編「三等車」の全文が出題されたということもあった。

稲子の「水」には、メタファーがある。「幾代の涙」と「水道の水」であり、他にもある。幾代の出身地、越中釜ヶ淵は、水の豊かな土地、山紫水明の地である富山県にあり、中でも霊峰立山連峰に近い現在の立山町である。そして、就職先の神田小川町は、関東大震災後、昭和二十二年神田小川町となった場所で、このあたりに、

「小川の清水」という池があった、もしくは、清らかな小川が流れていたともいわれている、大都会東京の真ん中である。冒頭幾代の涙と出身地、郷里、腰の曲がった母親を湯治に出したいという幾代の夢、さらに幾代の日々の仕事、皿洗いのため常に触れている水道の蛇口の栓を自らが開けることによって出てくる水、最後の、幾代が無意識に閉める水道の蛇口の栓から勢いよく出ていた水、すべて関連づけられている〈水〉といえよう。また、「水」では、幾代にとっての母はまさに大地で彼女の根源であり、最後の、展（ひら）けた景色も大地、先に述べたさまざまな形で表されている水、灰色のスカートが表す心の色も灰色だがそのようなことはおかまいなしに「空にはうらうらとした春の陽ざしがあった」。「ハハキトク　スグカヘレ」「ハハシンダ、カヘルカ」と緊急定文電報が続けざまに稲子の元へと届く。二通目の電報で急いだ上野駅では、自分がすぐにでも乗りたくても故郷の富山へ向けては走らない列車がホームにどっしりと陣取り、多くの人々が奇異な目をしゃがんで泣いている幾代へと送る格好の場となっている。上野駅を出発する際起こる列車とレールとの摩擦からの火花と、「火・水・空気・地」と四大元素とも読める。「春の陽ざし」と列車にさえぎられて、幾代のしゃがみこんでいる上野駅のホームの「駅員詰所との間の狭い場所は蔭になってい」て、陽と陰も描かれていると言えないだろうか。

稲子にとっての水とは、何であろうか。一家が上京して住んだ家は隅田川の近くにあり、稲子自身が勤め先のキャラメル工場の往復に、電車賃がなく歩くこともあった。稲子が、窪川鶴次郎と結婚し、自宅の場所を決める際、夫婦にとって重要なことは、工場があり、労働者が住んで、そして、水がよいところであった。

ここで、稲子のデビュー作（昭和三年）でプロレタリア作家としての道を歩み始めた『キャラメル工場（こうば）』から、水に関する表現を挙げてみる。キャラメル工場で働く女工らは、キャラメルの仕事が途絶えると化粧液の壜洗いをさせられた。湯ではなく水で洗わなければならない場面である。

少し水の外に手を出しているとぴりぴり痛んで見る見るヒビが切れた。すると彼女たちはあわててその手を水の中へつっこんだ。

黙りこくって壜を洗っているひろ子の鼻先からはなみだが落ちてきた。一〇

女工たちが壜を冷たい水ではなく、湯で洗いたいと願い、女工頭がその交渉にいっている間のことである。冷たい水は厭なはずなのに、手を少しでも外へ出すとヒビが切れる。そこで、その冷たい水へと手をとっさに入れるのである。〈水〉で救われるのである。何とも心が痛み、読んでいるのも辛い表現である。

① 東京・大森駅前八景坂「馬込文士村の住人」のレリーフ（大田区立郷土博物館、同資料展示室には、佐多稲子の直筆草稿「北陸の空と海」がある）
（平成 30 年 4 月 13 日撮影）

② ①と同所（同日）
佐多稲子、後ろに吉屋信子

四．灰色、春の陽―感情表現をふまえて

次に、本作での感情表現をみていきたい。感情とは、主に「喜怒哀楽」の四分説である。ここでは、佐多稲子の小説においてだが、それらには分類できない、語句のみならず、文レベルで感情が表現されていることは多々ある。まず、窪川稲子名を含んでの主な作品のタイトルをみてみると、『キャラメル工場から』、『くれなゐ』『素足の娘』『私の東京地図』『灰色の午後』『女の宿』『樹影』『時に佇（た）つ』『夏の栞』『年譜の行間』などのように比較的短く、難解な語や想像が及ばない語は含まれていない。もちろん、稲子がいつもタイトルをつけているとは限らない。その点、本稿で取り上げている「水」はシンプルでつい、水に感情などをつけて長くしそうなものだがそうはしていない。このシンプルなことは、我々の身近な水についての作品だと、読者へ容易にその世界へと入って行けることを印象づける。

「水」は冒頭から出てくる「しゃがんで泣いていた。」、「幾代は自分の膝の上で泣いていた。」など、「泣く」という表現が最初の段落で既に三箇所あり、幾代という泣

いている少女を強調している。それ以外にも最初の段落では、暗い、冷たい、地味な表現で埋めつくされている。「列車の鋼鉄の壁面」、「列車にさえぎられて、詰所との間の狭い場所は蔭になっていた」「グリーンのセーターに灰色のスカートをはいて」というふうにである。そのような中で、唯一明るく暖かい表現は、「正午を過ぎたばかりで、空にはうらうらとした春の陽ざしがあったが、」という箇所である。次の段落では「涙はとまらず」「涙を拭いていた」と、「哀」の表現が続き、読者をも哀しみが連続する予感へと引き込んでゆく。

さてここから、「水」において、喜怒哀楽では分類できない感情表現を挙げていきたいのだが参照として、時枝誠記等に師事し、表現分野の研究者である中村明の『感情表現辞典』(六興出版 昭和五十六年) を参照したい。「①喜②怒③哀④怖⑤恥⑥好⑦厭⑧昂⑨安⑩驚⑪複合」と詳細に分類しているのでこれを元にし、「水」で用いられている幾代、主人・妻、母親の感情表現を各立場から見てそのまま抜き出し、稲子の表現力を観察したい。

①喜・・・母親のたのしいおもい出話

②怒・・・母親はまだおこっているような調子、聞いていたけれど反応さえ見せなかった、

③哀・・・しゃがんで泣いていた、涙はとまらず、涙を拭いていた、自分ひとり打ちひしがれた悲哀にいることをそのまま受け入れて、とどめようもなくあふれ出る涙、幾代の身体をあわれむように見まわした。胸の中で母親を呼んでいた、幾代は優しい微笑みを浮かべているだけだった、(母親の) しのび泣き、苦労の悲しみ、母親はふびんがって、幾代の左脚が短いことを自分のせいのように謝ることがあった、いきなり大声でわめいて、あけすけな評言は、自分の悲しみをひそめた身体の中までずけずけと踏み込まれるようにしか聞けなかった、細い、しぼるような泣き声を上げて突っ伏した、唯一の安心の場所が無くなることだった、幾代の身体の悲しさ、母親の罪のために幾代が悲しみを背負っているのかもしれなかった、哀れみ、可哀想、劇しい悲哀、悲哀を深くしていた、完全にひとりになる、ひとりで背負ってゆく、その騒がしさは無関係だった

④怖・・・頼りなくまずしいことにちがいなかった、瞳孔のひらいてゆくような不安な表情をした、主人の疑いは大勢の使用人との関係で身についた警戒、背をこごめ、はやし立てられた、あけすけなほめ言葉までつけ足した

⑤恥・・・恥ずかしい、幾代の方が恥ずかしくなって

⑦厭・・・主人は狡猾に目を働かせた、不人情を言葉の上で瞞着しながら、半ば威圧を加えてまざまざと不機嫌になった。払いのけられたことが口惜しくて意地になって「いやだってば。」母親は真剣な声を立て身ぶるいして、重い足、悲しみを運んでそこまで歩いてきた

⑧昂・・・泣く、涙

⑨安・・・幾代は満足していた、安心

⑩驚・・・驚く

⑪複合・・・「次の電報を待つんだね。ほんとに危篤なら、今から帰ったって富山までじゃ、間に合やしないよ。」「はい。」そう答えるしかなかった幾代、負けてしまった自分の弱さ、敗北のまき添えにした口惜しさ、それは無意識に行われただけであった、唇を噛んで涙を浮かべた

このようにしてみると、「⑥好」はまったくなく、「喜・怒・恥・昂・驚」もほとんど出てこない。いかに、この作品が、「哀・怖・厭・その複合的」な感情表現で覆いつくされているかがわかる。幾代は、「明るいとはいえないにしろ、素直、どこかに負けん気をひそめていて、それが素直さにもなり、身体の引け目を見せぬ働きものにもするらしかった」。とあり、これはまるで稲子自身を物語っているようである。そして、幾代にとって母親の深く大きな存在に、逝ったあとで気づいた。「兄や姉の前にさえ、勝気にふるまう意識の操作」をしていた幾代は、「母親に対してだけは感ぜずにすんだ。」のだった。

次に、「春の陽があたった。」という表現について考察したい。稲子は、『国文学解釈と鑑賞』の「この人にきく」という特集において、渡邊澄子と鈴木康之との鼎談において、「水」における表現性について、最後の「その場所に、さえぎるものがなくなって春の陽があたった。」という結末について語っている。

そうそう、そう。これを私が、この、幾代に対して春の陽を当ててやりたくて、意図的に書いたんじゃないかという解釈があるわけなんです。（中略）私、別にそういうことはないのですよ、それは深読みなのよ。[二]

再度、『キャラメル工場』から、「陽」について描かれている場面をみたい。女工たちの仕事室は、終日陽が当らなかった。窓から見える家の屋根には広告板立てがあり、その広告板には一日中陽が当っていた。「その陽の光は幸福そうであった。[二一]」と書いている。陽への憧憬、自分たちがいる場へは当ってくれない寂しさがある。

ところで、先に紹介した富山の方言は、微妙なニュアンスを表すのに、カタカナを使用し、抑揚についても説明がされるなど、その土地で使われていることばをしっかりとらえ、登場人物らは地方の者であることが強調されている。稲子には、ことばに対する敏感さがあり、テンポがあり、ことばが特段難解でなくても洗練されている。「グリーンのセーターと灰色のスカート」グリーンとグレーではないかと言えるが、ここに、稲子の独特の表現のよさ、リズムが表れ、グレーでは平凡で効果がない、読者へ読みやすさからにしても響かないのである。灰色は灰のような色合い、黒・白とともに無彩色で、赤・青・黄の三原色の色料を混ぜ合わせた時、暗い灰色が出来上がる。他の何色とも合わせられる。落ち着きがあると言えるが、感情を表に出さない、無難、あいまい、ぼんやりとした感じである。幾代を市井の一少女として表すのにこうした色は最適で稲子は使っている。グリーンは、緑の色、自然の色で安定、平和の色であり、堅いイメージがある。稲子の作品には、灰色ということばはたびたび登場する。『夏の栞―中野重治をおくる―』では、親不知の様子を次のように書いている。

その日の北陸の海は、曇り空ながら和いでいた。（中略）空と海は合して灰色に深く沈みながら茫漠とひろがり、波は高く渚に打ち当って飛沫を上げていた。[二三]

その他、稲子は五十六歳の時、自伝的な長編小説、「灰色の午後」を『群像』に連載した。窪川鶴次郎と田村俊子の恋愛関係が引き起こした、稲子に対する裏切りを、

川辺折江と惣吉夫婦として描いている。四十一歳で窪川と離婚し、窪川稲子から佐多稲子になった彼女にとって、「灰色」とは、あきらめを意味する色、暗く心も沈むような色なのだが、身近に感じ、表現としても、最優先で必要な色彩であり、語感であり、もしかしたら用いることで安心感を得ようとしたのかもしれない。

③　幾代の出身地設定の町・
越中釜ヶ渕　現在の釜ヶ淵駅
（大正 10 年開業）
（平成 30 年 4 月 8 日撮影）

④　現在の釜ヶ淵駅　ホーム
富山地方鉄道立山線
富山県中新川郡立山町（同日）

五. 幾代の敗北

幾代の感情表現で次のような箇所がある。

昨日の電報のとき、主人に負けてしまった自分の弱さから、母親まで敗北のまき添えにしてしまったような口惜しさがあって、幾代の悲哀を深くしていた。

「敗北」を広辞苑で引くと、「古くはハイホクとも。「北」は逃げる意 ①戦いにまけて逃げること。敗走。②転じて、争いに負けること。ーを認める」と、書いてある。敗北と聞くと、「文学の敗北」と、芥川龍之介の文学を言った宮本顕治を思い浮かべる人もいるだろう。芥川が自ら命を絶つ三日前、稲子へ自分に会いに来るよう言い、突然、「あなたは、もう、もいちど死にたいとはおもいませんか」[四]と問いかけた。稲子は、「脂くさいレストランの二階の女給部屋で、ひとりでむせび泣いた」のだった。自ら命を絶つことは敗北なのだろうか。例えば、命を絶つという行動自体の前に、自らが敗北だと認めたうえで、自分自身に向けてだけ言えることばかもしれない。その行動自体は敗北とは別のもので承知した次の段階である。

幾代にとって、腰の曲がった歳より老けて見える母は、自分らしくいられる唯一の存在であり、過酷で寂しく口

惜しい思いをしていた、旅館での下働きにも、「給料を貯めて、一度は母親を湯治に出したい」という夢があったからこそ、耐えていた。入善の紡績工場で働いている姉が母親を既に湯治に出していた。幾代は負けん気が強いので、自分も働けるようになったら、「今度は自分が湯治に出してやりたいとおもった」のだった。幾代の左脚が短いことを不憫に思い、自分のせいのように謝る母、小学生だった幾代をはやし立てる男の子たちに、大声でわめき小石を投げ、幾代の方が恥ずかしくなってその場から走って逃げたくらい驚く行動をとった母、その母親を失い、旅館の主人夫婦が帰郷を許さなかったことではない、優しく、お悔やみのことばをかけてくれなかったことでもない、自分ですぐに帰ろうとしなかった、できなかった、優しい主人夫婦と勝手に思いこんでいた自分の甘さが情けなく、すべてに敗け、今その場からようやく逃げ出し、母の元へ急いでいるのである。幾代は、ことばはほとんど発せず、感情も終盤まで表さない。母が危篤の電報を受け取っても主人に「こんなものがきたんですけども」と、一切取り乱すことなく、相手に返事を委ねるように遠慮がちに伝え、主人の冷たい返事に対しても「はい。」とすぐ引き下がることしかしなかった。

稲子自身は生きている間ずっとたたかっていた。稲子は、「たたかい」と各作品の中で表していた。いつ、何とのそれかというと、稲子が生まれた時から既に始まっていたもの、まず、彼女が自分自身ではどうしようもできない境遇とのたたかいであった。学生同士だった両親、生母の早世、実父の転職、転地。家は貧しく、学校で充分な教育も受けられなかった。そのことを、稲子は幼い時から受け止めなければならなかった、既に承知していたその「いつもどこか冷めた、すべてを受け入れている自分」とのたたかいでもあった。稲子が言う。「自分の人生、将来はもう灰色にしか描けない。夢が持てなくなっていたんですね。」清凌亭で働いていた頃である。そして、その後、「出戻りで、子供があって、自殺未遂という恥しいこともやってのけて、世間から言われる悪いこと、全部しちゃったんですもの。(中略)それならこれからは自分の思うように生きよう。世間の目に縛られまいと思った。」稲子は、二十八歳頃、日本プロレタリア文盟の機関誌の編集や、小林多喜二、宮本顕治らと連絡を取りあった。日本共産党へ入党した。昭和十年に「働く女性」の

編集に関わったと起訴され、懲役二年執行猶予三年の判決が下りた。その後、四十七歳のとき日本共産党から除名処分を受けた。

稲子は、片山廣子が、「芥川さんはご自分だけではなく、ご自分の死によってまわりの人たちまで一緒に死なしておしまいになりました」といっていたことを聞いている。「自らの敗北は認めたうえで、自分の母親までその敗北のまき添えにしてしまった、あくまでも幾代の口惜しさによって、悲哀が深くなった」のである。

稲子が、『くれない』で描いた、夫・窪川鶴次郎が稲子の友人・田村俊子と恋愛関係に陥り、裏切った事件についてのことばを紹介する。

> あたし自身を含めて、夫婦に起こる問題は夫婦が負うべきものだという意味で、お互いの人生の敗北だと思うしかない。その敗北は、その後のあたしの生活に波及していく。（中略）頽廃が頽廃を生んでいく。そういう意味で人生的な敗北だと思うのです。一五

六．幾代の無意識の行動

稲子の表現力は、言語学的にみても非常に巧みで、リズム良く、独特の表現で、例えば会話はまるで読者の目の前で交わされているようである。「水」では、確かに終盤がクライマックスなのだが、上野駅のホームで、「幾代がしゃがんで泣き続けている」という現象は起こってはいるが、その他に駅での一般的な風景以外、何も見られない、起こらない。行きかう多くの人々がいるにもかかわらず、水道の栓を閉める者はおろか、泣いている幾代に声をかける人はおらず、駅員ですらしない。この「水」という作品は、主人公の発言はほとんどない。静かに流れてゆく中で、読者が各々感じることに委ねている。

ここで、作品の終盤、幾代が、「水道のそばを通り抜けぎわに、蛇口の栓を閉め」た結果、「音を立てて落ちていた水が止まった。が、（中略）それは無意識に行われただけであった。」という一文に注目してみよう。幾代のこの条件反射的な行動には、日頃から皿洗いという水を使いながらの仕事で身近なもの、水道の蛇口は仕事が終われば栓を閉めるものだという習性がしみついていて、そ

れがこのように泣きじゃくっている間にも、哀しいかな、無意識の行動として出てしまう。そして、読者の涙を誘う場面である。雑踏の中で、水の落ちる音は幾代には聞こえてはいないだろう、視覚でとらえたということになり、栓を閉めた。しかし、実母の死を聞いて即、実家へ帰れない、乗るはずの列車が来るのにはまだ一時間もある。母を思いながら泣いているのに、果たして、水道の蛇口からまっすぐ流れている出しっぱなしの水が目に入り、通りがけに蛇口をひねって水を止め、また元の場所へ戻って、泣き続けるであろうか。この一連の行動を作者は、無意識のうちに行われたという。結局、その時点で即座に東京を離れることができず、そばに兄や姉がいて哀しみを分け合うこともできない、しゃがみこんで泣くしかない無力な自分自身をもてあまし、ただ泣き続けていたのである。もう二度と会えない母を想う涙の中に、危篤の際に自ら帰郷を言い出せなかった悔恨、口惜しさ、自分への腹立たしさ、幾代の敗北だったのである。

七．佐多稲子と富山県との関わり

さて、稲子と富山県との関わりをもう少しみたい。

稲子は、富山へ来県し四十七歳、昭和三十四年十一月八日に、壷井栄、原泉、芝木好子と立山へ登り、「私もすぐそばで立山を見た、という満足感は、その立山が大きく美しく連なって私に迫っていた。[一六]」と表現している。また、四十九歳の時には、富山県砺波市と入善町にある呉羽紡績工場を厚木たかと訪れている。また、東京・戸塚町での生活では、高岡市出身の版画家、南桂子との交流もあり、昭和三十六年、アジア・アフリカ作家会議が東京・大阪で開催された大会で、日本代表の副団長として出席している。現・高岡市出身の堀田善衛もアジア・アフリカ作家会議第五回大会へ参加している。この第五回会議の件で、稲子宛、国分一太郎から昭和四十八年九月二十四日書簡が来ている。このようなことからも、富山県ゆかりの女性作家として、佐多稲子は取り上げられる機会があってもよいだろう。室生犀星『黄金の針』で、稲子は円地文子や吉屋信子、森茉莉らとともに評されている。犀星は、稲子とは「三十年のあひだに、三四度く

らゐしか會つてゐない。[一七]」としながら、「稲子さんのやさしさは近代風であつて日の當つてゐるように明るいのが特徴である。」など詳細に書かれている。

平成三十年四月、元・富山県立入善高等学校の校長であった霜野仁一が他界した。霜野は、稲子と入善町で会い、昭和三十四年、東京の稲子の自宅も訪ねている。[一八]稲子は、呉羽紡績の招待で、昭和二十八年、富山県入善町の呉羽紡績工場を実際訪れている。この取材を元に、『機械の中の青春』を書き上げた。霜野は、入善高等学校の文芸クラブで生徒を指導し、会誌「峠」の編集をし、佐多稲子にクラブ員を激励する寄稿を依頼した。若い教師の熱意を感じた佐多さんは生徒を励ますメッセージを「峠」に寄せた。さらに、富山県との関わりとして、南桂子が挙げられる。稲子が海外旅行中、ロンドンから、軽井沢の稲子の別荘にいた田島よつ宛に出した書簡には、「八日にパリからロンドンへきました。南桂子さんや宇佐美さんのお嬢さんといつもいっしょでした・・・。[一九]」とある。南桂子（一九一一～二〇〇四）は、現在の富山県高岡市生まれの版画家で、戦後、日本を代表する銅版画家として知られる。祖母・節子は高峰譲吉の妹である。南は、最初の結婚のち離婚して上京、稲子の紹介で壷井栄に会い、童話を学んだ。のちパリへ渡り、銅版画を始めた。二番目の夫は版画家の浜口陽三である。谷川俊太郎や朝吹登吹子、福永武彦へも挿絵・挿画を手掛けた。このように、富山県の芸術人とも稲子は関係がある。

八．おわりに

以上のようにみてきたとおり、「水」では、幾代と母親の強く深い絆、幾代の敗北に母をもまき添えにしてしまった口惜しさがあったという点に着目しなければならないだろう。稲子が繰り返す「敗北」「灰色」「陽ざし」について考え、幾代の「哀・怖・厭」という感情表現に注目した。幾代が水道の蛇口の栓を閉めた無意識の行動とは別の観点である。「水」では、稲子の幾代へ向けている優しいまなざしは根底にはあるとは言えるが、「春の陽があたる」という現象は、「水は当てなしに流れつづけていた。」と作者が描いているように、水道の蛇口からまっすぐに落ちる水は、何ものかによって栓を閉められたり、流れを遮られたりしなければ下へいつまでも流れ続ける

ものであるという現象と同様、普遍的なものとして描いている。解釈を読者に委ねている。稲子が幾代を応援しているように強く明るく感じている読者もいるであろう。だが、陽ざしは、必ずしも主人公のこれからの道を温かく見守っているというわけではなく、水道の蛇口から出る水と同様、ありのままの現象として描かれている。決して、激励しているとのみにはとらえられないことが、稲子自身のことばからもわかった。幾代の前途は、母の死後、心の支えと目的を同時に失った状況の中で、困難な道のりが待っていることは想像に難くない。しかし、それも幾代の運命ならば、彼女自身が受け入れ、考えながら生きていくのみであろう。そのような強さを稲子は、幾代の中に見ているのだろう。稲子自身が、繰り返し経験してきた困難に、自身で打ち勝ったように、である。「春の陽ざし」の代わりに、「白雨」や「涙雨」のようなしらじらしい表現語句をもし用いていれば、作品の完成度は落ちていたであろう。

本作で「ズックの鞄、パーマネント、ガーゼのハンカチ」など、冒頭から時代を表しながらもカナでおしゃれな文字が並ぶ。『キャラメル工場』では、女工頭の妹に生意気だと言われ、いじめられた主人公・ひろ子の「マント」が出てくる。稲子の母親が、小学校に入る前の稲子に、揃えてくれたハイカラな品物、ラシャのマントである。このようなハイカラな装いが作品にもたびたび形を変えて登場してくる。稲子は、赤という色が好きだった。特に、牡丹色、心の底に沈んでいる色が好きだった。色彩に敏感な稲子には、一つだけ好きなブランドがあった。著名な映画監督であった、長男の窪川健造（一九三〇―二〇一五）が三十六歳、稲子が六十二歳の時、一緒に、ヨーロッパ旅行をした際、義母よつへの土産にショールをと、「母にもたった一つのブランド漁りがあった。」とし、「ロンドン出立間際になってまでイエーガー本店でのショッピングに拘泥ったのであった。[二〇]」といっている。イエーガー　JAEGERとは、英国の紳士・婦人衣料品の高級ブランドである。もっとも稲子は「エガー」と発音したと健造が振り返っている。

余談になるが、筆者が佐多稲子を少しだけ身近に感じられる理由として、稲子が好きなイエーガー、筆者は、イエーガーの日本総代理店で勤めた経験があり、また、筆者の祖母方の縁戚に、呉羽紡績で役員をしていた者が

いた。稲子が実際工場を訪れて作品を書いてくれたなどと、随分一方的な思いはさておき、何より、作品に精いっぱいあふれる、表現豊かで言語学的才能のある稲子の短編には特に惹かれる。チェーホフとモーパッサンを愛し、両者の墓参りもしたという稲子、百十五年前に生を受け、描いた多くの作品は、現代の人や人生においても、強く心に響く秀逸なものとして貴重である。佐多稲子は、富山県出身の小寺菊子、尾竹紅吉（富本一枝）、そして、窪川鶴次郎、中野重治、室生犀星、芥川龍之介、菊池寛、久米正雄、堀辰雄、宮本百合子、円地文子らなどとも関連しながら、今後も幅広く研究できるであろう。

⑤　佐多稲子文学碑
相生市那波南本町中央公園内
（平成 30 年 11 月 21 日撮影）

⑥　佐多稲子文学碑　⑤の拡大
『素足の娘』より（同日）

注

一　佐多稲子『年譜の行間』中央公論社　一九八六年六月十日　七十九頁

二　講談社文芸文庫編『個人全集月報集』佐多稲子全集　講談社　二〇一四年八月八日　五十一頁

三　立野幸雄『越中文学の情景』桂書房　二〇一三年一〇月一日　五十四～五十六頁

四　佐多稲子『年譜の行間』中央公論社　一九八六年六月十日　十六頁

五　金田一春彦『日本語』新版（上）岩波書店　一九八八年六月六日　二五九頁

六　北日本新聞ウエブ　近代史研究会・竹島慎二　とやま地名のはなし二二五　釜ヶ淵（かまがふち立山）二〇一八年三月十日閲覧 http://webun.jp/item/7371829 医者の家に泊まった武士が医者を殺害し、釜を川の流れが深くよどんでいる淵へ投げ捨てたところ、淵の底から亡くなった娘たちの泣き声が聞こえるようになり、釜ヶ淵と呼ぶようになった。稲子は来県時に聞いたか。

七　金田一春彦『日本語』新版（上）岩波書店　一九八八年六月六日　五十九頁

八　磯田光一　評伝的解説　佐多稲子『現代日本の文学二十五　円地文子　佐多稲子集』学習研究社　一九七五年十月一日　四七八頁

九　坂上弘　解説　佐多稲子『女の宿　佐多稲子短編集』旺文社

一九七六年七月二十日　一九八頁
一〇　「キャラメル工場から」『現代日本の文学二十五　円地文子
佐多稲子集』学習研究社　一九七五年十月一日　二五七頁
一一　「文学のことばを語る」『国文学　解釈と鑑賞』第五三巻七号
至文堂　一九八八年七月一日　六十～七十六頁
一二　「キャラメル工場から」『現代日本の文学　二十五　円地文子
佐多稲子集』学習研究社　一九七五年十月一日　二五五頁
一三　佐多稲子『夏の栞―中野重治をおくる―』　新潮社
一九八九年六月二十五日　一八一～一八二頁
一四　佐多稲子　「私の東京地図」『作家の自伝三十四　佐多稲子』
二〇〇二年十一月二十五日　日本図書センター　一八五頁
一五　佐多稲子『年譜の行間』中央公論社　一九八六年六月十日
二三二～二三三頁
一六　佐多稲子『女の道づれ』講談社　一九六六年五月十日　一九四頁
一七　室生犀星『黄金の針　女流評傳』中央公論社
一九六一年四月五日　五十六頁
一八　北日本新聞　記事十五面「わたしと越中文学」①霜野仁一
「佐多稲子と『水』」二〇〇八年十月一日
一九　日本近代文学館編『文学者の手紙七佐多稲子』博文館新社
二〇〇六年四月二十八日　八十二～八十三頁
二〇　窪川健造「三つの喜び」佐多稲子研究会編『凛として立つ』
青柿社　二〇一三年八月二十三日　百三十五頁

【付記】本稿での「水」の引用は、『佐多稲子全集』
第十二巻　講談社一九七八年十一月二十日に拠った。
※相生市立歴史民俗資料館文化財専門員の中濱久喜
氏には、同館展示の佐多稲子資料についてのご解説、
刊行物のご恵贈、文学碑のご案内等ご協力いただいた。
また、佐賀市在住の八田千恵子氏には、『草茫々通信』
十二号「凝視の先に―佐多稲子の文学―」を、すみだ
郷土文化資料館からは、たより「みやこどり」第二十
号「生誕百年すみだゆかりの文学者」をご恵贈いただ
いた。ここに御礼申し上げる。

【参考文献】

・小林裕子編『人物書誌大系二十八　佐多稲子』
日外アソシエーツ　一九九四年六月二十五日
・小林裕子『佐多稲子―体験と時間』　翰林書房
一九九七年五月二十日
・佐多稲子研究会編・発行『くれない』第九号　追悼号
一九九九年十月二十日
・『草茫々通信』十二号「凝視の先に―佐多稲子の文学―」
二〇一八年六月二十九日　書肆草茫々　八田千恵子